

クラシック音楽へのお誘い

ベートーヴェン 交響曲第5番〈運命〉

2019/4/20 水戸市立東部図書館

水戸芸術館 篠田大基

クラシック音楽を楽しむ

好きな曲を見つけて……

いろいろな演奏を【聴き比べる】たのしみ

1曲を【聴き通す】たのしみ

そして 【コンサートに行く】たのしみ

～本日のメニュー～

ベートーヴェン交響曲第5番〈運命〉を

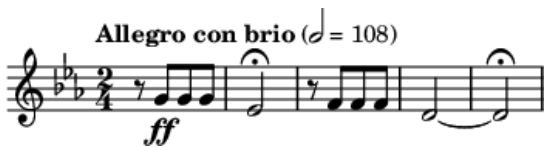
⇒ 10の録音で演奏史をたどる

⇒ 小澤征爾指揮、水戸室内管弦楽団の演奏を録音で聴いてみる

⇒ 5月の演奏会のご紹介

ベートーヴェン (1770～1827) 交響曲第5番 ハ短調 作品67〈運命〉

1808年完成。4音の動機（通称「運命の動機」）が4つの楽章全体を通して現れる



「ある日、筆者の前で、ベートーヴェンは第1楽章の冒頭を指して、この作品の根本理念を次の言葉で表現した。

「こうして運命は扉をたたくのだ！」

（アントン・シンドラー伝記『ベートーヴェンの生涯』より）

……信憑性は？

【聴き比べる】「運命は扉をたたく」？ 戦後の演奏史をたどる10の録音

- 小澤征爾指揮 サイトウ・キネン・オーケストラ（2000年9月録音）

今回の参照点 [レファレンス]

Seiji Ozawa (1935～) 中国生まれ。日本人として初めてブザンソン指揮者コンクール第1位。齋藤秀雄、ミュンシュ、カラヤン、バーンスタインに師事。ボストン交響楽団音楽監督、ウィーン国立歌劇場音楽監督を歴任。サイトウ・キネン・オーケストラを組織。セイジ・オザワ 松本フェスティバル総監督、水戸室内管弦楽団総監督、水戸芸術館館長。

- ヴィルヘルム・フルトヴェングラー指揮 ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団（1947年5月25日録音）
ロマン主義的（演奏者の表現性を重視）。テンポを自由に揺らし、休符の“間”を効果的に用いる。

Wilhelm Furtwangler (1886～1954) ベルリン生まれ。ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団常任指揮者。戦後、戦争犯罪人の嫌疑で演奏禁止となるが1947年5月25日復帰。

- エーリッヒ・クライバー指揮 アムステルダム・コンセルトヘボウ管弦楽団（1953年9月録音）
「即物主義」的（楽譜に忠実であろうとする）。テンポを揺らさず“間”をおかずにたたみかける。

Erich Kleiber (1890～1956) ウィーン生まれ。ベルリン国立歌劇場総監督を務めたが、ナチスに抗議して辞任。その後はブエノスアイレスを拠点に活躍。戦後はウィーンに復帰。

- ヘルベルト・フォン・カラヤン指揮 ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団（1962年3月9～12日録音）
構築的。音から音へのつながりを明確に描いて前進感を作り出す。

Herbert von Karajan (1908～1989) ザルツブルク生まれ。1955年にフルトヴェングラーの後任でベルリン・フィルハーモニー管弦楽団常任指揮者。クラシック音楽界に絶大な影響力を持ち、多くの録音を残した。

- フェレンツ・フリッチャイ指揮 ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団（1961年9月録音）
スローモーションで音楽を分析的に表現。

Ferenc Fricsay (1914~1963) ブダペスト生まれ。1949年からベルリン市立歌劇場とRIAS交響楽団の音楽監督。白血病により入退院を繰り返しながら指揮活動を行うが1961年12月に活動を断念。48歳で死去。

- レナード・バーンスタイン指揮 ニューヨーク・フィルハーモニック（1961年9月25日録音）
抒情的。遅めのテンポとなめらかな奏法。情感に富む。

Leonard Bernstein (1918~1990) マサチューセッツ生まれ。1957年にアメリカ人として初めてニューヨーク・フィルハーモニック首席指揮者に就任。世界中のオーケストラを指揮する一方、作曲家としても活躍。

- カルロス・クライバー指揮 ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団（1974年4月録音）
速いテンポで高い推進力。構築的であり情熱的。

Carlos Kleiber (1930~2004) エーリッヒ・クライバーの息子。ベルリンに生まれ、父の事情でアルゼンチンに亡命。世界中の歌劇場やオーケストラに客演したが、特定のポストには就かず、フリーランスの立場を貫く。

- サー・ジョン・エリオット・ガーディナー指揮 オルケストル・レヴォリユーション・エ・ロマンティック（1994年3月録音）

作曲当時の楽器、奏法を採用（古楽）。その結果としての急速なテンポ、息の短いフレーズ構成。

Sir John Eliot Gardiner (1943~) イギリス生まれ。古楽演奏の第一人者。モンテヴェルディ合唱団、同管弦楽団、イギリス・バロック管弦楽団、オルケストル・レヴォリユーション・エ・ロマンティックを組織。

- リッカルド・シャイー指揮 ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団（2009年9月録音）
モダンのオーケストラでの演奏。古楽の成果を利用しつつ独自の新しい解釈。

Riccardo Chailly (1953~) ミラノ生まれ。各地のオーケストラの音楽監督、常任指揮者を務め、2005年から2016年までライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団カペルマイスター。現在ミラノ・スカラ座音楽総監督。

- ニコラス・アーノンクール指揮 ウィーン・コンツェントゥス・ムジクス（2015年5月8~11日録音）
古楽のオーケストラでの演奏。小編成。メッサ・ディ・ヴォーチェ（音を直線的に伸ばさない）。

Nikolaus Harnoncourt (1929~2016) ウィーン交響楽団のチェロ奏者を経て1953年にウィーン・コンツェントゥス・ムジクスを設立。古楽演奏の先駆者であり、モダンのオーケストラも指揮。尖鋭的な解釈で知られる。

【聴き通す】小澤征爾指揮、水戸室内管弦楽団を聴く……構築性、明晰性、情熱

「音を分離するっていうのかな、音の中身が聞こえるようにするわけです。というのが今の風潮じゃないですかね。これなんか絶対古楽器演奏から来てますよね」

（村上春樹『小澤征爾さんと、音楽について話をする』）

水戸室内管弦楽団第95回定期演奏会（第2部指揮：小澤征爾） ライブ録音がCD化

会場：水戸芸術館コンサートホール ATM、2016年3月25、27日

【予備知識】そもそも、交響曲って何？

起源はオペラやオラトリオの序曲（オペラ・シンフォニア）

17世紀後半 急・緩・急の3部分構成がパターン化

18世紀 オペラ本体から切り離され、3つの部分それぞれが大規模化

⇒急・緩・急の3楽章構成の交響曲の成立

第1楽章を「ソナタ形式」に整える（ハイドン）

急・緩・急の3楽章に3拍子の舞曲「メヌエット」を加え、4楽章構成に（マンハイム楽派）

メヌエット楽章を速い3拍子の音楽「スケルツォ」に置き換える（ベートーヴェン）

ソナタ形式：2つの主題と3つの部分でできた形式

交響曲第5番 ハ短調 作品67 〈運命〉

● 第1楽章

アレグロ・コン・ブリオ [快速に、生き生きと]

ハ短調 2/4拍子 ソナタ形式

第1主題

VI. I
VI. II
Br.
Vc.

第2主題

VI. I
VI. II, Vla
Klar.
Vlc, B.
Fag.

● 第2楽章

アンダンテ・コン・モート [歩くようにゆっくりと、動きをつけて]

変イ長調 3/8拍子 2つの主題をもつ変奏曲

変奏される第1主題

Violoncelli und Violen

変奏の間に挿入される第2主題

Trompeten in C

● 第3・4楽章

アレグロ [快速に]

ハ短調 - ハ長調 3/4拍子 - 4/4拍子 3部形式 - ソナタ形式

第3楽章に登場する4音の動機（ホルン） 第4楽章の途中でも回想される

¹⁹
a2
ff

第4楽章第1主題

この最後の楽章で初めてトロンボーン、ピッコロ、コントラファゴットが登場することにも注目

「この交響曲においては、誰かが外から扉を叩くのではなく、むしろ扉は内側から開け放たれ、そこにいたものが広いバルコニーへと躍り出るかのように、これらの楽器によって、曲自体が外へと連れ出されるイメージを見出していた。」(ニコラス・アーノンクールの言葉)

(序奏)

- 提示部 第1主題 (主調)
第2主題 (転調)

(通例2回繰り返す)

- 展開部 様々な調で主題を変形

- 再現部 第1主題 (主調)
第2主題 (主調)

(結尾 [コーダ])